医局だより

札幌医科大学医学部消化器・総合、乳腺・内分泌外科学講座
空閑 陽子

札幌医科大学消化器・総合、乳腺・内分泌外科は1952年に第一外科学講座として創設され、第3代教授である平田公一先生は、2010年に第18回日本乳癌学会学術総会の会長を担当されました。2015年に講座名を現在の消化器・総合、乳腺・内分泌外科へ名称を変更し、現在の教授である竹政伊知朗先生が着任されました。当教室はその名の通り総合外科学講座であり、上部消化管チーム、下部消化管チーム、肝胆膵チーム、乳腺チームに分かれ、各チームで診療に当たっております。乳腺チームはチーフである九冨五郎先生、サブチーフである島宏彰先生のスタッフ2名と、大学院生1名、診療医2名の計5名です。後期研修医の先生もローテーターとして数ヶ月、ローテーションしてくれています。乳腺チームは何よりも非常に仲が良く、私はチーム内で最年少ではありますが、先輩方にアドバイスをいただきやすく、また意見を述べやすい環境でもあり日々感謝しております。今回ニュースレターへの投稿にあたり今年度

ver.のチーム写真を撮影しましたが、activeな雰囲気が伝わる写真が良いです！という私の発言でこのような謎ポージングに至りました。総合教室であるがゆえの厳しさもありますが、手術手技・手術記録へのこだわりやエネルギーデバイスの使用など、消化器チームから刺激を受ける機会も多々あります。現在、腋窩郭清は基本的に全ての症例でエネルギーデバイスを使用しております。乳癌領域は薬物療法が主体となり、外科手術の重要性が次第に薄れていく傾向にありますが、局所コントロールとしても外科治療は依然として重要であり、今後も手術手技にこだわって参りたいと考えております。当科での乳癌手術症例は2016年131例、2017年140例、2018年168例と年々増加し、2019年には213例と初めて200例を突破しました。形成外科とも協力し合い、同時再建症例も年々増加しています。院内での科としての手術枠が限られている状況ではありますが、今後とも精力的に症例数を増加させていきたいとチーム一同考えております。

もちろん手術症例だけではなく、薬物療法にも積極的に取り組んでおります。残念ながら首都圏のように、乳腺をメインとした腫瘍内科の先生方が多くいらっしゃる訳ではないため、周術期のみならず転移・再発症例の薬物療法も我々が担当しています。薬物療法の選択に関してはチームカンファレンスにて情報を共有し合い、患者さんに適した治療を提供できるよう努めております。カンファレンスに関しても、他職種との連携をキーワードに、当科他チームと放射線科との術前術後カンファレンス、形成外科との合同カンファレンス、病理部との乳腺・病理カンファレンス、臨床遺伝・産婦人科とのHBOC症例検討カンファレンス、がん認定看護師との症例カンファレンスなどを開催しています。HBOC症例検討カンファレンスでは、遺伝子診療科の櫻井晃洋先生とも協力し合いながら診療を進めております。

また北海道の特徴として広大な医療圏が挙げられ、乳腺専門医は都市圏に集中しており偏在は否めません。そこで当科では遠隔医療にも取り組み、地方病院での乳癌手術の際、遠隔指導を行っています。また、地方の関連病院にも定期的に診療に赴き、地方の乳癌患者さんも適切な治療を受けられるよう力を注いでおります。そして北海道全体として、乳腺専門医の数も決して充足しているとは言い難い状況です。今後の北海道の乳腺診療を発展させていくためにも、他大学とも協力しながら、学生さんや初期研修医の先生方に乳腺外科に興味を持ってもらえるよう努力して参ります。